

公益財団法人 海外子女教育振興財団

AG5 事務局 御中

2020 年度 AG5 報告書

1. 報告者	
(1) 学校名	シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校
(2) 氏名	鈴木 輝英
2. 実施体制	
各学年部から推進委員1名を選出し、研究主任を中心とした研究推進委員会を組織し、研究に関する事項の起案を行った。職員全員参加の全体会にて研究に関する事項の検討、また研究の進行状況の報告を行った。研究実践に関しては、全体会での確認事項を基に、各学年部で研究計画を作成し、実践、成果と課題のまとめを行った。COVID-19 の影響で一堂に会して参観をする研究授業を行えない現状がある中、資料や少人数グループ討議を基にした「実践共有」「実践報告」を定期的に行った。一連の研究の流れの中で、AG5 担当がアドバイザーとして適宜研究に関わった。	
3. テーマ	
主体的に学び、よりよい考えを生み出す児童の育成を目指して ～IB の要素とオンラインによる在宅学習を生かした ESD の実践～	
4. 目的と概要	
◎本研究で目指す児童像 世界を巡る情勢は現在加速度的に進歩を続けている。近年 ICT の発展がめまぐるしく、AI(人工知能)が社会を形成する一端を担い、重要な役割を果たしていく時代が近い将来やってくることが予想される。しかし、そのような発展の一方で環境問題・貧困問題等、地球規模での問題も山積していることも現実である。児童たちがこれから迎えようとしている時代が、どんなものになっているのかは、非常に予測が難しい。そんな中、児童たちが今後未知なる問題に直面したとき、その問題の本質を的確に捉え、最適な解決策を考え、実行し、よりよい時代を作り上げていく力が必要となってくる。今まさにそのような力を児童たちに付けていくことが、教育の責務の一つだと考える。 2018 年 4 月より施行されている「シンガポール日本人学校グローバル人材育成大綱」では、本校のグローバル人材像として、「世界中どこにおいてもそこで共に生き、持続可能な未来社会実現に向けて活躍することができる日本人」を掲げている。そこでは、目指す児童生徒の姿の 1 つに、「持続可能な未来社会を実現するための探究力(洞察力、思考力、判断力、表現力)を身に付ける児童生徒」が明記されている。 ◎本研究テーマ設定の趣旨と方向性 以上を受けてシンガポール日本人学校では、総合的な学習の時間をチャンギ校・クレメンティ校では「探究科基礎」、中学部では「探究科」と称して、シンガポールという地の利を生かした現地理解教育を中心に、より探究的な学習を推進している。本校においては昨年度より、「持続可能な社会のための教育(ESD)」に取り組んでいる。また、昨年度途中からは「国際バカロレア(IB)」の要素を取り入れた実践に着手してきた。今年度は本研究の 2 年目となり、探究科基礎における授業実践を中心に据えて推進してきた。 また、今年度は世界的な COVID-19 の影響により、4 月よりシンガポール国内でロックダウンが実施され、オンラインによる在宅学習を余儀なくされた。その中では、学校から配付されたクロームブックや家庭用 iPad を用いて、Google meet を活用した双方向型の授業が模索されてきた。ロックダウンが終了し、分散登校が開始されるまでの約 2 か月間で、在宅学習の実践は着実に積み上げられたといえる。児童の通常登校が開始された後も、学校現場を取り巻く環境がロックダウン以前の姿に戻る目途は立っておらず、ソーシャルディスタンスを考慮しない従来型の授業形態、学校行事、校外学習の実施は困難な状況	

である。よって、本校の研究として、オンラインによる在宅学習を生かした実践を取り入れることは、これからの教育の在り方を模索するうえでも意義深いと考えた。

よって本年度本校の校内研究では、昨年度の「プログラミング教育」や「持続可能な社会のための教育(ESD)」をとおして積み上げた「目的意識・学び・思考のプロセスを大切にしたい問題解決型学習」を基礎として、サーキットブレーカー中に培ったオンラインによる在宅学習の強みを生かした実践を目指していくこととした。

◎本研究で目指す授業実践

a. 地理的特性を生かした探究的な「持続可能な社会のための教育(ESD)」

シンガポールという地理的・文化的に特殊な環境を有効に活用しながら、「持続可能な社会のための教育(ESD)」を推進していく。「持続可能な開発目標(SDGs)」が掲げる目標を ESD の実践に取り入れ、目標に向かうための活動や思考の場面を意識した授業実践を目指していく。

b. IB の要素を取り入れた深まりのある学び

本校では、「IB の要素」を以下の 2 点を取り入れた探究的な学びの実践を目指していく。

- ① セントラルアイデアを中心に据えたカリキュラム作り(表 1)。
- ② キーコンセプトを活用した授業づくり(表 2)。

セントラルアイデアとは、「児童に身に付けさせたい価値観」のことをいう。多くの場合、教師が一言で言い切れる短文として表され、児童にとっては馴染みのないもの、抽象性が高く、一度見たり聞いたりしただけでは理解が難しいものとなる。このセントラルアイデアを基に、児童は探究的な学びをしながら自分なりの納得解を導き出し、価値観を形成していく。さらに、学校での授業やオンラインによる在宅学習など、探究科基礎の時間以外の場面でも取り入れ、定期的に想起させる。

表 1 本校における学年別セントラルアイデア

学年	セントラルアイデア
3	人々のおもいがまちをつくっていく
4	よりよい暮らしと環境は影響し合っている
5	科学技術の進歩によって私たちの生活は変化し続けている
6	真実に向き合う力がわたしたちに平和をもたらす

表 2 IBにおけるキーコンセプトと本校における導入学年

	キーコンセプト	和訳	低学年	中学年	高学年
1	Causation	原因・理由	◎	○	○
2	Change	変化・変容	◎	○	○
3	Connection	関連・影響	◎	○	○
4	Form	特徴・構造	○	◎	○
5	Function	機能・役割	○	◎	○
6	Perspective	視点・視野	○	○	◎
7	Responsibility	主体・責任	○	○	◎
8	Reflection	評価・省察	○	○	◎

◎導入 ○継続

キーコンセプトとは、「物事を見る視点」のことをいい、1 年間の授業計画の中で、単元や授業を選びながら明示される。また、セントラルアイデアにせまる探究的な学びを深めるために、1 つの事象を多角的に捉え、分析する際に活用していくものである。教師は 8 種類のキーコンセプトの中から、単元や授業ごとに 1 つ、もしくは複数選定し、学習計画を立てる。授業中、児童は度々明示されるキーコンセプトを意識しながらグローバルな視点に立って学習する。さらに、キーコンセプトは思考したり表現したりする際の基準となる。セントラルアイデアと同様、教科の枠に囚われずに扱い、授業以外の活動や校内掲示にも導入することで、定期的に想起させる。

c. オンラインによる在宅学習

本校では学校再開後も定期的にオンラインによる在宅学習を実施してきた。この取組を全校で継続していくことで、学校では実施が難しい内容の実践や、今年度実施できない校外学習に代わる実践を行っていく。目指す授業実践の特徴として、主に以下の 2 点があげられる。

- ① 児童一人ひとりの興味や能力に応じた探究的な学習。
- ② 教師と児童、もしくは児童同士が学び合える双方向型の学習。

①については、これまでの実践例を生かしながら、今後も児童一人ひとりの興味や能力に応じた探究的な学習を模索していく。②については、今年度学校での実践に制限がある中、「オンライン」と「在宅」という強みを生かしたより効果的な新たな授業形態を模索していく。以上の理論の基、研究を推進していく。以下の図 1 は今年度研究の構想図である。

豊かな国際性を身に付けた子どもの育成

- ・世界中どこにおいてもそこで共に生き、持続可能な未来社会実現に向けて活躍することができる日本人。
- ・持続可能な未来社会を実現するための探究力（洞察力、思考力、判断力、表現力）を身に付ける児童生徒。

主体的に学び、よりよい考えを生み出す児童の育成

未知なる問題に直面したとき、その問題の本質を的確に捉え、最適な解決策を考え、実行し、よりよい時代を作り上げていく力。

研究主題

ESD の学習

- ・探究科基礎・生活科等で、自分たちが住む地域、国内や周辺国、世界が抱えている問題をテーマに、「目的意識→論理的思考・学び」のプロセスを踏んだ課題解決型学習。
- ・「持続可能な開発目標（SDGs）」が掲げる目標を取り入れ、目標に向かうための活動や思考の場面を意識した授業実践。

キーコンセプト

Causation, Change, Connection,
Form, Function, Perspective,

IB の見方 ・考え方

セントラルアイディア

人々のおもいがまちをつくっていく。
よりよい暮らしと環境は影響し合っている。科学技術の進歩によって私たちの生活は変化し続けている。真実に向き合う力がわたしたちに平和をもたらす。

オンラインによる在宅学習

- ・児童一人ひとりの興味や能力に応じた探究的な学習。
- ・教師と児童、もしくは児童同士が学び合える双方向型の学習。

地域の特徴

シンガポールの
経済発展・計画経済

多国籍文化

COVID-19

強い政治力

自由と統制
のバランス

図1 本校校内研究構想図

d. セントラルアイディアにおける他教科との連携案作成

探究科基礎 ESD カリキュラムを基に、各学年の年間指導計画一覧表（全教科）の中からセントラルアイディアに関わる各教科の単元を選定し、関連を明示した他教科との連携案を作成する。

5. 今年度実施した取組み（※研究会や出張等は日程も含め記載してください）

4月30日（木）職員会議（15:00～16:30）

【議題】2020年度探究科基礎基本方針について
オンライン授業基本方針について

6月25日（木）職員会議（15:40～16:30）

【議題】オンライン授業具体的方針と実施について

7月2日（木）

7月9日（木）

7月16日（木）

今年度校内研究の素案検討（研究主任・AG5 担当）

7月22日（水）第1回校内研究推進委員会（15:50～16:30）

【議題】2020年度校内研推進委員会について
2020年度におけるクレメンティ校の研究主題と実施計画について

8月20日（木）第1回校内研究会全体会（10:30～12:00）

【議題】昨年度の成果と課題、研究の経緯について

2020 年度の研究主題と校内研究で目指す授業実践について
2020 年度の研究計画について
今後の予定について

8 月 21 日(金) 臨時校内研究推進委員会(10:00~10:30)

【議題】キーコンセプト掲示様式について
オンラインによる在宅学習について

8 月 28 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

《6 年生》探究科基礎「シンガポール国家の意味調べ」

8 月 31 日(月) 第 2 回校内研究推進委員会(15:40~16:10)

【議題】授業実践計画案について
セントラルアイデア・キーコンセプトの扱いについて
探究科基礎学習計画の見直し・修正について
今後の予定について

9 月 4 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

《4 年生》探究科基礎「よりよい暮らし調査」

9 月 11 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

《4 年生》探究科基礎「よりよい暮らしと環境との関連調査」
《5 年生》探究科基礎「NUS 交流会に向けた異学級発表会」

9 月 18 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

9 月 22 日(火) 5 年生 NUS(National University of Singapore)オンライン交流会

9 月 25 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

9 月 30 日(水) 第 2 回校内研究会全体会(15:40~16:30)

【議題】各学年部からの授業実践計画案について
《1 年生》単元「じぶんでできるよ」(生活科)
《2 年生》単元「どきどきわくわくまちたんけん」(生活科)
《3 年生》単元「だれもがしあわせに住み続けられるまちづくりを」(探究科基礎)
《4 年生》単元「救え！シンガポールの危機」(探究科基礎)
《5 年生》単元「We are ambassadors in Singapore!」(探究科基礎)
《6 年生》単元「わたしたちがつくる『希望の道』」(探究科基礎)

質疑応答

指導助言(学校長より)

10 月 2 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

10 月 9 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

10 月 12 日(月) 第 3 回校内研究推進委員会(15:40~16:10)

【議題】中間報告会について
実践状況の確認について
実践共有週間について
今後の予定について

10 月 16 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

《4 年生》探究科基礎「5 年生との成果発表交流会」
《5 年生》探究科基礎「4 年生との成果発表交流会」
《6 年生》探究科基礎「シンガポール歴史調べ」

10 月 19 日(月) 6 年部授業実践交流週間(教師が作成した動画を基にした校外学習に代わる実践)

10 月 23 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

10 月 26 日(月) 5 年部授業実践交流週間(大泉小学校との実践交流会)

10 月 27 日(火)

10 月 29 日(木) } 5 年生東京学芸大学附属大泉小学校オンライン交流会

10 月 30 日(金) 4~6 年生オンライン授業(5・6 時間目実施)

- 11月 1日(月) 5年生東京学芸大学附属大泉小学校オンライン交流会
2年部授業実践交流週間(キーコンセプトを活用した調べ学習と交流活動)
- 11月13日(金) 全校オンライン授業(1～3年生 5時間目、4～6年生 5・6時間目実施)
《2年生》生活科「地域商業施設調べ学習発表会」
《3年生》探究科基礎「自分の住まいの隣地調査と報告会」
- 11月16日(月) 第3回校内研究会全体会(14:50～16:30)
【議題】4～6年部授業実践中間報告 *グループ別討議
《4年生》「家庭内や周辺で調査を行うオンライン授業」
《5年生》「外部機関、他学年とのオンライン交流会」
《6年生》「校外学習に代わる教材開発とオンライン授業」
質疑応答
指導助言(学校長より)
- 11月23日(月) 3年部授業実践交流週間(オンライン授業による自宅とその周辺の調査実践)
- 11月30日(月) 4年部授業実践交流週間(教師が収集した資料を基にした校外学習に代わる実践)
第1回職員研修会(15:00～16:00)
テーマ:「PYP 授業実践について」 講師:開智望小学校 五木田洋平教諭
【内容】PYP教育の概論
PYP教育の実践
「セントラルアイデア」につながる手立て
「キーコンセプト」の扱い方
質疑応答
- 12月 7日(月) 1年部授業実践交流週間(キーコンセプトを活用した意見交流活動)
- 12月 9日(水) 香港日本人学校・シンガポール日本人学校(チャンギ校・クレメンティ校)3校情報交換会
- 12月11日(金) 全校オンライン授業(1～3年生 5時間目、4～6年生 5・6時間目実施)
《3年生》探究科基礎「街づくり調査発表会」
《6年生》探究科基礎「シロソサから学んだ歴史を、発表会に向けてまとめよう」
- 12月21日(月) 第4回校内研究推進委員会(15:50～16:20)
【議題】教育課程の振り返りについて
3学期の活動について
- 1月15日(金) 全校オンライン授業(1～3年生 5時間目、4～6年生 5・6時間目実施)
《1年生》生活科「ゲストティーチャー動画を見て、家族と一緒に考えよう」
- 1月18日(金) 第5回校内研究推進委員会(15:40～16:10)
【議題】中間報告会について
授業実践最終報告会について
今年度の反省、成果と課題、来年度の方向性について
今後の予定について
- 1月25日(月) 第4回校内研究会全体会(14:50～16:30)
【議題】1～3年部授業実践中間報告 *グループ別討議
《1年生》「ゲストティーチャーによる動画配信」「家族とともに学ぶ在宅学習」
《2年生》「キーコンセプトの基礎的学び」「家庭の協力を得た校外学習実践」
《3年生》「google meetを活用したグループによる調べ学習と話し合い活動」
質疑応答
指導助言(教頭より)
- 2月19日(金) 全校オンライン授業(1～3年生 5時間目、4～6年生 5・6時間目実施)
《4年生》探究科基礎「クレ校環境サミット」
- 3月 1日(月) 第5回校内研究会全体会(14:50～16:30)
【議題】各学年部からの授業実践最終報告について
2020年度校内研究の反省、成果と課題について

次年度研究の方向性について

指導助言(学校長より)

3月5日(金) 全校オンライン授業(1～3年生5時間目、4～6年生5・6時間目実施)

《3年生》探究科基礎「5年生とのSDG's発表交流会に向けて」

《5年生》探究科基礎「3年生とのSDG's発表交流会に向けて」

3月9日(火) 3・5年生SDG's発表交流会

6. 今年度の成果・効果 (※詳細に記載し、成果物があれば添付してください)

本研究2年目ということで、昨年度研究における「セントラルアイデア」や「キーコンセプト」の理論の積み上げの基、そして昨年度末に策定した探究科基礎 ESD カリキュラムをベースに今年度の研究をスタートさせる予定であった。しかし年度当初はロックダウンによる学校閉鎖が続き、思うように実践を進めていくことが困難であった。しかし逆にこの期間があったことで、昨年度の成果と課題を改めて振り返り、カリキュラムを見つめ直す良い機会となり、各学年部で今年度の研究計画を練る十分な時間が確保でき、確実に実践をスタートさせることができた。

「セントラルアイデア」については、昨年度設定したものと同様のものを活用し、探究科基礎の授業(低学年では生活科)の中で取り扱った。昨年度の4年部の実践をロールモデルとしながら、その他の学年でセントラルアイデアを取り入れた実践を今年度から始めた。実践を進めていくうちに、セントラルアイデアの授業内での位置付けや扱い方をどう考えていけばよいのかという疑問が出てきた。セントラルアイデアを「単元をとおした探究活動で身に付ける価値観」と捉え、昨年度のPYP認定校での報告内容やPYPに関する書籍に倣い、本校では「毎回の授業の冒頭で提示」、「教室・校舎内掲示(写真1)」を手だてに、児童たちへセントラルアイデアの意識付けを行った。実践を重ねるごとに、教師も児童もセントラルアイデアを意識するようになった。更に授業や単元のまとめの際には、児童なりにセントラルアイデアと結びつけて物事を考え、感想を記入し、更に追究しようとするようとする姿も見られるようになった。しかし、単元や本時のねらいとセントラルアイデアが毎回必ずしも一致しているわけではない場面もあり、教師が指導する場面や児童が探究活動をする場面で混乱が生じることもあった。毎回セントラルアイデアを扱うのか、セントラルアイデアを出すのはどのタイミング良いのかについては、今後も検討の余地がある。

「キーコンセプト」については、本校では6年間という長いスパンで段階的・系統的にキーコンセプトを扱うこととした。(表2)そして教室掲示(写真1)やマグネットを付けたキーコンセプトカードを黒板に貼り授業で活用することによって、児童がキーコンセプトを使って物事を考えることの日常化を図った。また探究科基礎(写真2)のみならず、他教科においてもキーコンセプトを積極的に活用していった(写真3)。以上の手立てを講じ続けたことによって、児童はキーコンセプトを使って結果のまとめや考察・分析ができるようになってきた。また教師側からの指示がなくても、あらゆる場面で児童からキーコンセプトの言葉が出るようになり、進んで活用しようとする姿が見られるようになった。

「キーコンセプト」については、本校では6年間という長いスパンで段階的・系統的にキーコンセプトを扱うこととした。(表2)そして教室掲示(写真1)やマグネットを付けたキーコンセプトカードを黒板に貼り授業で活用することによって、児童がキーコンセプトを使って物事を考えることの日常化を図った。また探究科基礎(写真2)のみならず、他教科においてもキーコンセプトを積極的に活用していった(写真3)。以上の手立てを講じ続けたことによって、児童はキーコンセプトを使って結果のまとめや考察・分析ができるようになってきた。また教師側からの指示がなくても、あらゆる場面で児童からキーコンセプトの言葉が出るようになり、進んで活用しようとする姿が見られるようになった。

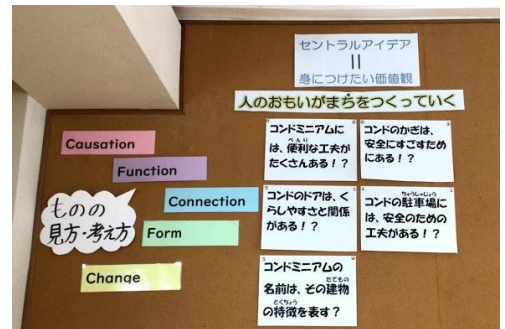


写真1 セントラルアイデアとキーコンセプトの掲示

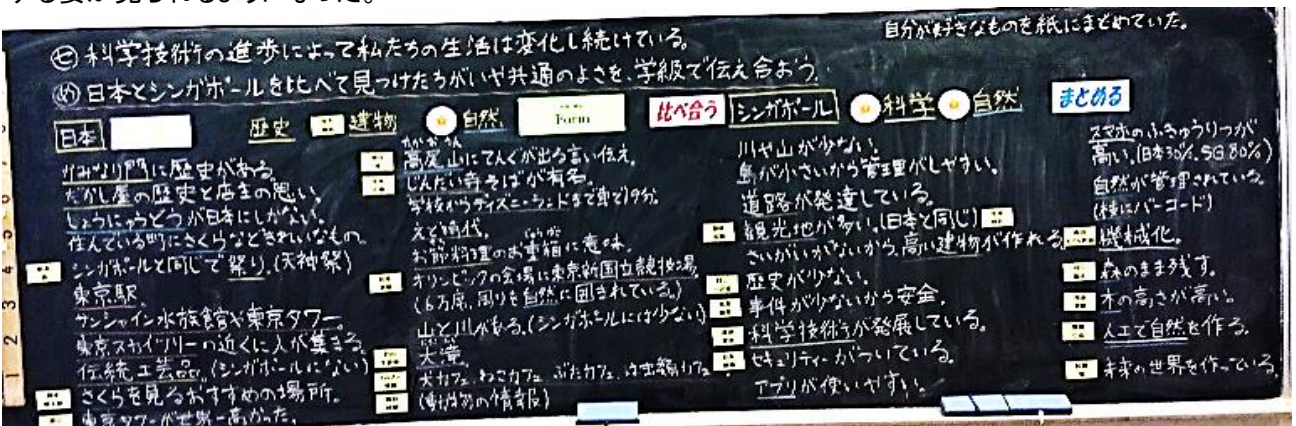


写真2 探究科基礎におけるキーコンセプトの活用

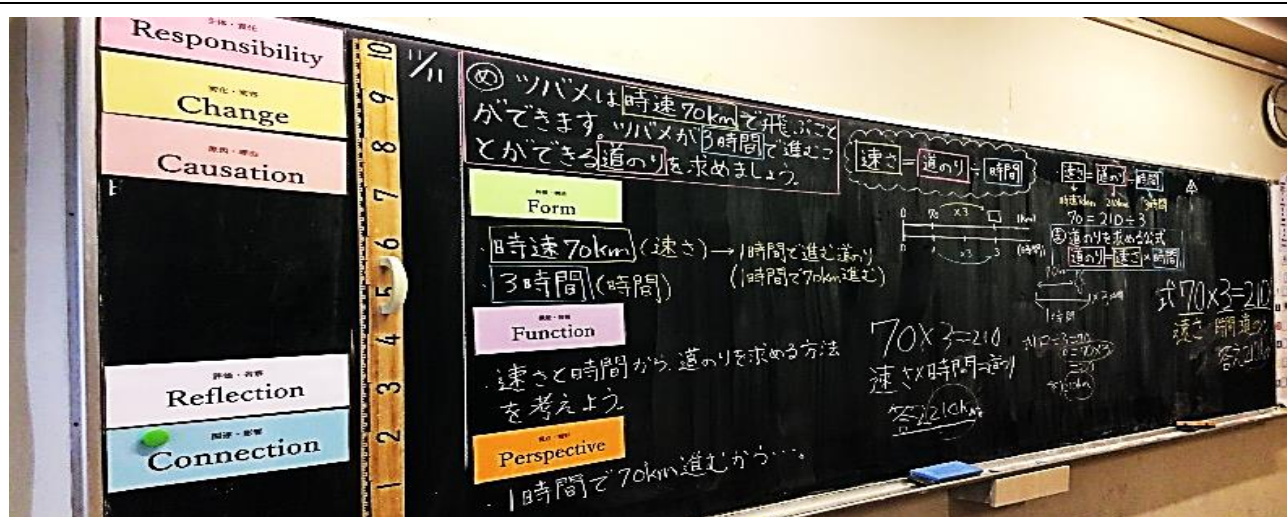


写真3 他教科におけるキーコンセプトの活用

しかし、キーコンセプトは英語表記が基本である。特に低学年にとっては英語表記であるとキーコンセプトの意味を捉えづらいのが現状である。キーコンセプトをより分かりやすいものにするために、和訳したものを活用したが、PYP で目指すキーコンセプトとニュアンスがずれてしまう。キーコンセプトの表記方法については、今後も実践を重ねながらより良い方法を模索していく必要がある。更に今年度の実践の中で、キーコンセプトを使うこと自体が目的になる場面もあった。キーコンセプトは学習を深化させるツールとはっきりと位置付け、今後も効果的にキーコンセプトを実践に組み込んでいきたい。

今年度 COVID-19 の影響で年度当初カリキュラムに組み込まれていた「校外学習」を中止せざるを得なかった。しかし探究的な学びを進めていくうえで体験的活動や隣地調査は必要不可欠である。そこで、ロックダウン中に培った「在宅オンライン授業」を生かし校外学習に代わる活動を模索し実践することで、探究科基礎 ESD カリキュラムを進めていくこととした。



各学年の教師が、本来校外学習に行く予定だった施設に赴き、資料を集め、写真・動画を撮影した。これらを基に動画編集ソフト等で、音声解説も交えながらねらいに迫るための動画を作成した。(写真 4)また、ゲストティーチャーによる動画も作成し、外部人材を生かす実践もあった。そしてオンライン授業でそれらを活用することで、校外学習と同等の効果の上がる実践を行うことができた。また在宅という強みを生かし、家庭やその周辺での隣地調査を行うオンライン授業も行い、探究的な学びの実践の幅を広げることができた。

更に、オンライン授業を互いの成果発表の場(写真 5)として活用する実践も行った。学級・学年の垣根を越えた、他学級・他学年との交流が活発になった。互いに学び合い、刺激し合いながら、上級生は下級生の見本に、下級生は上級生から学ぶ機会となった。

オンライン学習を年間通じて行うことにより、ICT を活用する力を高めながら、教室の中では得られない学習効果を得ることができた。

現在セントラルアイデアとの「カリキュラム連携案」(表 3)を策定中である。本年度の実践を踏まえ、各教科の年間指導計画に記載されている学習内容と本校探究科基礎で扱っているセントラルアイデアと関連の深いものをピックアップし、計画に明示していくものである。一目で見やすく、シンプルなものにしていくために、関連事項に網掛けを施したものである。今年度末までに各学年すべてで策定し、来年度の実践へと繋げていく予定である。



写真5 オンライン授業における発表会の様子

表 3 年間指導計画とセントラルアイデアのカリキュラム連携表

別紙2 セントラルアイデア連携表 (作成途中の例) ※「平成31年度 教科年間指導計画一覧表」をもとに例示。														セントラルアイデア(科学基礎の連携)によって育ちた児童の姿は変化し続けている。									
月	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
4	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
5	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
6	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
7	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
8	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
9	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
10	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
11	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
12	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
小計	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12									
1	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
2	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
3	探究	英語科Ⅱ連携	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	美術	道徳	総合	外国語	キャリア教育	学校行事									
小計	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12									

7. まとめ

1 年目で固まりつつあった理論を基に、今年度は授業実践を中心に、研究の積み上げを行った。また教師の反省からは、「掲示物など学年統一して取り組んだことで一体感をもって取り組めた」、「実践共有がなされたことで多くの学びが得られた」、「昨年度よりセントラルアイデアとキーコンセプトについての理解が深めることができた」など、昨年度の反省に比べ、前向きに捉えているものが多く挙げられた。今年度実践して見えてきた成果は、来年度以降も継続、更に積み上げがなされるよう、今後も研究に邁進していきたい。

しかし一方で見えてきた課題も多々ある。「単元目標とセントラルアイデアの区別が曖昧」、「設定しているセントラルアイデアが本当にこれでもいいのか」、「セントラルアイデアに繋げるための手立てが不十分」、「児童の変容を客観的に捉えられていない」、「評価の仕方が見えない」、「キーコンセプトや単元の系統性はそのままではよいのか」などの声も、教師の中から挙がってきている。「評価」や「児童の変容」については、本年度後半からの課題として、iPad で児童の活動の様子や成果物を記録するなど、評価をするための「児童の見取り」について研究を進めてきているが、来年度以降も継続した研究の必要性を感じている。

実践を積んできたからこそ見えてきたものである。課題が上がることは、本研究にはまだ伸びしろがある証拠である。今年度の実績を踏まえたうえで、来年度も探究科基礎 ESD カリキュラム、セントラルアイデア、キーコンセプトを更に見直し、改善を加えながら、本研究の3年目に突入していきたいと考えている。

8. 次年度の計画

AG5 事業 2 年目。2019 年度から始まった本研究テーマ「主体的に学び、よりよい考えを生み出す児童の育成を目指して」の基、次年度も3年目も継続した研究を実践していく。

「自己評価や他者評価、教師評価のための『ルーブリック評価』の策定」、「児童の変容を基にした、本研究の成果の実証」、「単元内容、セントラルアイデア、キーコンセプトの系統性の模索」。以上の3点を次年度の研究の柱に据え、実践していきたい。

9. 所感

今年度は COVID-19 の影響により、教師一堂に会しての研究授業、研究会を行えない現状がある中、少しでも研究を深めていくために、「実践共有週間」を設けて、各学年の実践を学校全体に共有し、広め、互いに学び合う環境を整えた。校外学習もそうであるが、「この現状だからできない」と考えるのではなく、「この現状で

最大限にできる」ことを考えていく、発想の転換、ピンチをチャンスに変える力が大切だということが、今年度の研究をとおして私が学んだことである。世界を巡る情勢は加速度的に進歩が続けている昨今、目の前の児童は、「予測不可能な未来」にこれから羽ばたこうとしている。これから未知なる壁に当たることもあるだろう。私たち教師は「未知なる問題に直面したとき、その問題の本質を的確に捉え、最適な解決策を考え、実行し、よりよい時代を作り上げていく」児童を育成することが一つの責務であると冒頭で述べた。今年度私たちはまさに COVID-19 など未知なる壁に当たった。しかしそんな中、この状況と向き合い、試行錯誤をしながら、新たな実践の可能性を見出すことができた。今年度私たち教師が、そんな目指すべき児童の姿のモデルとなり、身をもって児童に示すことができた 1 年間になったと感じている。

※記入欄は適宜拡張してください。